

# 記憶の継承 70歳誓う

県遺族代表 伊予市・好永さん

## 両親の代わり初出席 今秋にも家族と再訪へ

父さんと母さんの代わりに来たよ。被爆から70年を迎えた「原爆の日」の6日、広島市の平和記念公園で開かれた平和記念式典に、愛媛県遺族代表の伊予市宮下、団体役員好永誠さん(70)が出席した。生後7カ月だったあの日から、足を踏み入れていなかった爆心地を初めて訪れ、犠牲者の冥福を祈るとともに、命を守ってくれた両親への感謝の思いを新たにしました。

「かげろうのように空の空気が揺れた瞬間、『爆撃や』と叫んで側溝に隠れた」。爆心地から約2・5キロ。機械製造工場にいた父の務さんは生前、よく原爆について語った。

務さんは爆風で倒壊した工場で動員学徒らの無事を確認した後、妻ヨシミさんと長男誠さんがいる社宅に

向かった。街では、焼けただれた皮膚をジャガイモの皮のように垂れ下げた人や、息絶えた母親の胸元で泣く赤子など、この世の地獄を見たという。

その日、ヨシミさんは配給のため炎天下をバス停へ歩いていった。眠った誠さんをゆっくり寝かそうと引き返し、おんぶひもをほどいて抱きかかえたその時、爆風で吹き飛ばされた。障子の棧(さん)が脇腹に突き刺さったヨシミさんは、口を切って血を流す誠さんに夢中で乳を飲ませた。泣きやむ誠さんに「大したけがではないのだから」と胸をなで下ろしたという。

再会を果たした3人は務さんの故郷松山市に身を寄せ、自給自足を夢見て東温市の開拓地に入植した。以来、両親は被爆地に足を運ぶことはなかったという。

「被爆地のむごさを思い出したくなかったのだろう。誠さん自身も記憶のない出生地を回ることはなかったが、被爆70年の節目を迎えた6日、社宅があった南観音地区を歩いた。母親の愛情から引き返し

た社宅、水を飲むとうとした遺体で埋まった川、助けを求めた声にどうしようもなかった惨状……。現地を歩き自分の目で見ることで、両親から聞いた光景がまぶたに浮かんだ。今後は定期的に被爆地を訪れることを心に決めた。子ども、孫、ひ孫計11人に恵まれた誠さんは、今秋にも家族一緒に再訪するといふ。「次世代に継承するにつれ記憶が薄まる中で、この被爆地に来て家族に平和の尊さを伝えたい」

(高田未来)

えひめ  
戦後70年



原爆死没者慰霊碑の前で手を合わせる好永誠さん(中央)  
＝6日午前9時5分ごろ、広島市